

[B年] 聖霊降臨日(2026年5月24日)**【旧約聖書日課】 ヨシュア記 1章1～9節**

¹主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。

²「わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。³モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。⁴荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。⁵一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。⁶強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。⁷ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれてはならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。⁸この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。⁹わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うるたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

【使徒書日課】 使徒言行録 2章1～11節

¹五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、²突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。³そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。⁴すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

⁵さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、⁶この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だ

れもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつげにとられてしまった。⁷人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。⁸どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。⁹わたしたちの中には、バルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、¹⁰フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、¹¹ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くとは。」

【福音書日課】マルコによる福音書 4章26～34節

²⁶また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、²⁷夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。²⁸土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。²⁹実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時だからである。」

³⁰更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。³¹それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、³²蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

³³イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。³⁴たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨシュア記 1章1～9節

1主の僕モーセの死後、主はモーセの従者であったヌンの子ヨシュアに言われた。2「私の僕モーセは死んだ。さあ今、あなたとこの民は皆立ち上がり、このヨルダン川を渡りなさい。その先には、私がこの民、イスラエルの人々に与える地がある。3私はモーセに告げたとおり、あなたがたの足の裏が踏む所をことごとくあなたがたに与える。4この荒れ野から、あのレバノン山、大河ユーフラテスに至るまで、さらにヘト人のすべての地と、太陽の沈むあの大海に至るまでが、あなたがたの領土となる。5あなたの命の続くかぎり、誰一人あなたの前に立ちはだかる者はいない。私がモーセと共にいたように、私はあなたと共にいる。あなたを見放すことはなく、あなたを見捨てることもない。6強く、雄々しくあれ。私がこの民の先祖に誓い、今この民に与える地を、彼らに受け継がせるのはあなただからだ。7あなたはただ、大いに強く、雄々しくありなさい。私の僕モーセがあなたに命じた律法をすべて守り行い、そこから右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功を収める。8この律法の書を口から離さず、昼も夜もこれを唱え、書かれているすべてのことを守り行いなさい。そうすれば、あなたは、行く先々で栄え、成功を収める。9強く、雄々しくあれと、私はあなたに命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行っても、あなたの神、主があなたと共にいるからだ。」

使徒言行録 2章1～11節

1五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話しだした。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国出身の信仰のあついで人々〔異本→ユダヤ人〕が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、誰もが、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられた。7人々は驚き怪しんで言った。「見る、話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうして、それぞれが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか。9私たちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、リビアのキレネ側の地方に住む者もいる。また、滞在中のローマ人、11ユダヤ人や改宗者、クレタ人やアラビア人もいるのに、彼らが私たちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

マルコによる福音書 4章26～34節

26また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が地に種を蒔き、27夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。28地はおのずから実を結ばせるのであり、初めに茎、次に穂、それから穂には豊かな実ができる。29実が熟すと、すぐに鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

30また、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。31それは、からし種のようなものである。地に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、32蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

33イエスは、このように多くのたとえで、人々の聞く力に応じて御言葉を語られた。34たとえを用いずに語ることはなかったが、ご自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

- ・5月24日「聖霊降臨日」の日課主題は「聖霊の賜物」。
- ・旧約日課は、「ヨシュア記」から、本書冒頭でモーセの後継者として立てられたヨシュアに主が使命を告げる場面の箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、聖霊降臨の出来事を伝える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「神の国」がたとえて教えられる一連の箇所の一部。

旧約日課(ヨシュア1章より)

- ・「ヨシュア記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分では「前の預言者」の第一巻に位置づけられる歴史物語文書。正典「律法(トーラー)」で展開される「モーセ物語」に接続する物語として、モーセの後継者ヨシュアの物語として構成されている。
- ・「ヨシュア」は、モーセの後継者としてエジプトを出て40年の荒野の旅を続けたイスラエルの民を約束の地カナンに導き入れた人物とされ、「モーセ物語」の初期から「モーセの従者」として登場させられている。また、エジプトを出て2年目の最初のカナン入植の機会には、12人の偵察隊の一人として派遣され、ユダ族カレブと共に入植を進言している(民13章)。当該箇所では、「ヨシュア」が元来「エフライム族…ヌンの子ホシュア」の名であったが、モーセによって「ヨシュア」と呼ばれるようになったとされている(民13:8,16)。モーセによる後継指名は、「申命記」の最後で描かれている(申31章)。このような「モーセ物語」における「ヨシュア」の扱い方は、「モーセ物語」自体がモーセを絶対的な指導者として描き出すことと同時に、そのモーセの後継者としてあらかじめ「ヨシュア」が準備されていたことを強調するためのものであることを示唆している。「ヨシュア記」においてヨシュアは、ゲリジム山とエバル山に挟まれた聖所シケムを「律法」朗読のためにイスラエルを終結させる場所とし(8:30以下、24章)、また「シロ」の地に「臨在の幕屋」を立てて「主の契約の箱(神の箱)」を安置させ(18章)、さらに各部族の割り当て地を定めた人物として描かれており、「カナン」の地に定住するイスラエルの基礎を築いた人物として唯一無二の存在とされている。「ヨシュア」をギリシア語で表記した名が「イエスス」、すなわち「イエス」。
- ・日課箇所は、「モーセ物語」中でヨシュアがモーセの後継指名を受けたとされる一連の記事(申31章)を踏まえて、その実現として物語られている。これらの記事の関連において鍵となっているのが「律法(トーラー)」に対する忠実さを求める記述である。「モーセ物語」全体で「律法(教え、指示)」は主要な鍵語となっているが、ヨシュアに関連する記事でこれが取り上げられるのは後継指名記事のみ。「ヨシュア記」では、申31:9以下を受けた形で、8:30以下に「律法」朗読場面が置かれている(24:26も参照)。

使徒書日課(使徒2章より)

- ・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」。復活後に四十日間弟子たちの間に現れられた主イエスが昇天前に弟子たちに告げていた「聖霊降臨」の約束と「宣教派遣」の命令に基づいて、五旬節に聖霊降臨を体験した弟子たちの「教会」がさまざまな妨害や混乱を乗り越えて世界宣教を展開していく様子を、前半は使徒ペトロを軸に、後半はパウロを軸に描いている。
- ・日課箇所は、主イエスの昇天後にエルサレムに留まっていた120人ほどの弟子たちの集団が経験した「聖霊降臨」の出来事として描かれている。この出来事が「五旬祭(ペンテコステ)」が祝われる最中に起こったこととして伝えられており、その祭りの名がそのままキリスト教三大祭の一つ「ペンテコステ」の呼称となった。「五旬祭」は、ユダヤ教三大祭の一つ「七週祭」のギリシア化した呼称。「七週祭」は、「過越祭」から七週後に祝われ、「過越」の出来事によってエジプトを出たモーセとイスラエル一行がシナイ山に辿り着き「律法」を授与されたことを記念する。
- ・「聖霊降臨」の出来事が「五旬祭」=「七週祭」の最中に起こったこととして伝えられるのは、この出来事を「新しい五旬祭=七週祭」として位置づける意図によるものと考えられる。ただし、「聖霊の降臨(授与)」という事柄そのものを「律法の授与」に代わるものとして位置づけ、「律法」の時代から「聖霊」の時代に移った、と解するのは、「使徒言行録」を貫く「宣教」という主題と必ずしも適合しない。本書の「宣教」という主題から示されるのは、かつてモーセを通して「律法」が民に授与されたという事態が、「聖霊降臨」によって一人ひとりの弟子たちにまで及んだ、という意味での「新しい律法授与」という視座である。「ルカ福音書」は、主イエスが「ラビ」や「律法学者」のような「律法解釈者」として「律法」を解釈して教え、弟子たちと共に宣教活動を続けられたことを物語るが、主イエスの昇天後、つまり主イエスという「律法解釈者」を喪失した後、弟子たちは、「聖霊授与」によって主イエスに代わって「律法」を解釈して教え、また共に宣教活動を展開する道を拓かれた、というのが「使徒言行録」における「聖霊降臨」の出来事の位置づけであろう。
- ・日課箇所「聖霊降臨」に伴って弟子たちが語り始めた描写は、端的に「外国語で語り始めた《異言》現象」として解釈されることがある。「新約」で「異言」と訳されることのある語「グロッサー」は、日課箇所では「舌」(3節)または「言葉」(4節、11節)と訳されている(本書で「異言」と訳されるのは10:46と19:6)。おそらく本書がここで描こうとしている焦点は、「聖霊降臨」によって弟子たちが「異言」という能力を得るようになったということではなく、それまで特定の言語(ヘブライ語=アラム語、ギリシア語)で解釈され教えられていた「律法」=「神の偉大な業」を、あらゆる言語で解釈し教え、宣教し始めたことにあるのだろう。

福音書日課(マルコ 4 章より)

・日課箇所は、「種蒔きのたとえ」から始めて一連の「神の国」に関する「たとえ」を用いた教えを語られたことを集中的に伝える章句(4:1~34)の一部。「共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)」が共通して類似の設定で「神の国のたとえ」をまとめて伝えているが(マタイ 13:1~52、ルカ 8:4~21)、そこに含まれるたとえは福音書ごとに異なる。

・日課箇所は、「マルコ」が一連の「神の国のたとえ」の最後に置いた「たとえ」とまとめ句。二つの「たとえ」(26~29 節、30~32 節)は、「神の国」のあり様が植物をたとえに用いて語られている点で「種蒔きのたとえ」とも共通しており、いずれも小さな「種」から始まって大きく豊かに成長させられる様を「恵み」として描くことで、そこに「神の国」の本質を見ようとしていると解せる。他方で、まとめ句(33~34 節)は、「種蒔きの譬え」に関連して主イエスが語られたという「たとえを用いる理由」(4:10~12)と整合しないように解せる。つまり、主イエスの説明では、「たとえ」を用いるのは聞いた者の「理解」を遠ざけるためであると解せるのに対して、日課箇所のまとめ句では、聞く者の聞く力に合わせるためであると解せる。しかし、いずれにしても「たとえ」は、主イエスと聞く者との接点として機能する修辞法として位置づけられており、弟子たちに対するような「説明」と異なる方法による「律法」の解釈と教え、また宣教の意義を示すものとなっている。

・「比喩(たとえ)」は、西洋古典的な修辞技法の分類において主要な技法に位置づけられている。

来週の誕生日 (5 月 24 日~30 日)

来週の誕生日 (6 月 1 日~7 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-343「聖霊よ降りて」(= I 499 番)は、19 世紀米国メソジスト教会の牧師ストークスの作詞。曲は、日本のメソジスト派讃美歌集『譜附基督教聖歌集』(1884 年)の編纂に際して依頼して作曲された。
- ・21-406「聖霊ゆたかに」の作詞は、15 番「みことばにより」の作者 J・モンゴメリーで、原歌詞は 6 節まである。曲は、20 世紀前半に活躍した作曲家 P・C・バックによってラテン語聖歌のために作られたものの転用。
- ・21-79「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美歌で、19 世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。
- ・21-342「神の霊よ、今ぐだり」(= I 183 番)は、19 世紀の英国教会司祭で盛期はもっぱらロンドンで文学活動をしたジョージ・クローリーの作詞。曲は、19 世紀英国の教会音楽家 F.C.アトキンソンが別の讃美歌(218 番「日暮れてやみはせまり」)の歌詞のために作曲したものを転用。

21-343「聖霊よ、降りて」

Hover o'er me, Holy Spirit

1. Hover o'er me, Holy Spirit, / Bathe my trembling heart and brow;
/ Fill me with Thy hallowed presence, / Come, oh, come and fill me now.
[Refrain:] Fill me now, fill me now, / Holy Spirit, fill me now; / Fill me with Thy hallowed presence, / Come, oh, come, and fill me now.
2. Thou canst fill me, gracious Spirit, / Though I cannot tell Thee how;
/ But I need Thee, greatly need Thee, / Come, oh, come and fill me now. [Refrain]
3. I am weakness, full of weakness, / At Thy sacred feet I bow; / Blest, divine, eternal Spirit, / Fill with pow'r, and fill me now. [Refrain]
4. Cleanse and comfort, wholly save me, / Bathe, oh, bathe my heart and brow;
/ Thou dost sanctify and seal me, / Thou art sweetly filling now. [Refrain]

21-406「聖霊ゆたかに」

O Spirit of the Living God

1. O Spirit of the living God, / In all Thy plenitude of grace, / Where'er the foot of man hath trod,
/ Descend on our apostate race.
2. Give tongues of fire and hearts of love / To preach the reconciling Word,
/ Give power and unction from above, / Where'er the joyful sound is heard.
3. Be darkness, at Thy coming, light; / Confusion, order in Thy path;
/ Souls without strength inspire with might; / Bid mercy triumph over wrath.
4. O Spirit of the Lord, prepare / All the round earth her God to meet;
/ Breathe Thou abroad like morning air, / Till hearts of stone begin to beat.
5. Baptize the nations; far and nigh / The triumphs of the cross record;
/ The Name of Jesus glorify, / Till every kindred call Him Lord.
6. God from eternity hath willed / All flesh shall His salvation see;
/ So be the Father's love fulfilled, / The Savior's sufferings crowned through Thee.

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.
Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun,
/ O Lord, have mercy on me.
2. Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]

21-342「神の霊よ、今ぐだり」

Spirit of God, descend upon my heart

1. Spirit of God, descend upon my heart; / Wean it from earth,
through all its pulses move; / Stoop to my weakness, strength to me impart,
/ And make me love you as I ought to love.
2. I ask no dream, no prophet ecstasies, / No sudden rending of the veil of clay,
/ No angel visitant, no op'ning skies; / But take the dimness of my soul away.
3. Have you not bid me love you, God and King; / All, all your own, soul, heart,
and strength, and mind? / I see your cross; there teach my heart to cling.
/ Oh, let me seek you and, oh, let me find!
4. Teach me to love you as your angels love, / One holy passion filling all my frame:
/ The baptism of the heav'n-descended dove, / My heart an altar, and your love the flame.